
魔導師がユメみたセカイ。

津森太壱。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔導師がユメみたセカイ。

【Nコード】

N6437Y

【作者名】

津森太吉。

【あらすじ】

名もなき孤児の少年が出逢ったのは、守護者の名を継ぐ魔導師だった。彼に名を与えられた少年は、のちに「堅氷の魔導師」という国史上最強の力を有する魔導師となっていく。

01 : また魔導師が、遠きユメをみる。(前書き)

*魔導師シリーズ短編の主人公「堅氷の魔導師」の始まりの物語で
ございます。

こんにちは。

新たに物語を書き連ねますこと、お許しくださいませ。

01 : また魔導師が、遠きユメをみる。

目を覚ますと、そこには真っ白な天井が広がっていた。染み一つ、クモの巣一つなく、随分と清潔そうな天井だ。

「……目が覚めたのかい」

横から声がして、どうやらそれはこの清潔そうな部屋のあるじのようで、視線を泳がせる。視界に捉えたその姿に、少しだけ、ほんの少しだけ、畏怖を覚えた。

「だれ……」

艶のない白と灰色の髪、黒っぽい双眸、それは見たことのない配色だった。老人ならまだしも、こんな、自分よりいくらか歳上だろうという青年に、その色はあまりにも不似合いだ。

「……おまえ、話せるのかい」

無表情に見下ろしてくる顔は、ぱっとしたものは感じられないが、黒っぽい双眸の奥には底知れないなにかを感じる。均衡が取れた顔つきだが、その黒っぽい双眸のせいかな、できれば直視したくない。だが、黒っぽい双眸は自分を視界に捉え、放そうとしない。

「話せるなら、それでいい。手間が省けるからね」

「……だ、れだ」

「おまえこそ、誰だい？」

畏怖を感じても、なぜか恐怖は感じない双眸に、軽く息を呑む。自然と身体が逃げを打ったが、不思議なことに腕にも脚にも力が入らなかった。

「な……んで」

「崖から転落すれば、まあ無事では済むまいよ。生きているだけでも奇跡だろうね」

「……がけ？」

「憶えていないのかい」

なんのことが、わからない。いや、それ以前に、自分がどうしてこんな状態になっているのかも、なぜ青年に覗きこまれているのかも、わからない。いったい自分になにが起こったというのだろう。

「状況確認もよいが、まずは教えなさい。おまえは誰だい？」

混乱した頭に、冷や水でも浴びせるかのように、青年は淡々と問うてくる。状況を確認することのほうが先であるように思うのだが、青年はそう思っていないらしい。

「お、れ……は」

誰、と青年に訊いておきながら、同じように問われても、答えられない自分がいる。

誰、と問われて、持っている答えなど、なかった。

「……名は？」

おれ、という自分に名前があるとしたら、それは「おまえ」とか
「おい」とか、それこそ「おれ」だ。

「……ないのかい」

いつまでも答えないと、さらりと答えを見つけられた。
軽く唇を噛む。悔しいからではない。悲しいからではない。欲し
かったと、憧れさえ抱く羨望のためだ。

名、というものは、平等に与えられるものではない。それが個人
のために存在するものであるのなら、なおさら、平等というものや
公平な言葉は、生きるすべての人間に与えられるわけではないのだ。

「わたしは、イーヴェ・ガディアン。守護者の名を継いだ魔導師だ」

「……いい、ヴェ？」

「そう。おまえは……そうだね、カヤ、と呼ばうか」

「は……？」

「白い髪、森色の瞳……天地の化身たる万緑の神、カヤディナイン。
そこから名を頂戴して、カヤ。おまえにはちよつとよかるう」

随分と大層な名をつけられた気がする。けれども、名をつけられ
るその心地よさは、たまらなく胸をしめつけた。

「おれに、名を……くれるのか」

「要らなかつたかい？」

反射的に沈黙し、だが、しつかりと首を左右に振った。

人間らしい扱いを受けたのは、初めてだ。それを素直に嬉しいと
思う自分がある。たとえ青年が、初対面で見ず知らずの人間でも、
人間として扱ってくれるそのことに変わりはない。そして彼は、わ

わざわざ自分のために、「名」を考えてくれたのだ。名がないと自由だと人はよく言っていたが、だからといって名を与えようとすることはないのである。あとが面倒になるとわかつているから、なければいままにしておくものなのだ。

彼は、あとの面倒など考えていないのかもしれない。考えなしに、ただ名をつけたのかもしいない。

それでも、名をつけられるというのは、嬉しいものだ。

「おまえが誰かわかったところで……」

青年、イーヴェという彼が、誰だと言ってきたのは名を知るためだけだったらしい。それ以外はどうでもいいのか、それまでじつと捉えていた目を反らすと、イーヴェは立ち上がった。

「食事にしようか、カヤ」

そうイーヴェが言ったとたん、美味しそうな香りが漂ってきた。なんていい香りだろう。なんて軟らかい匂いだろう。

なぜだか涙が溢れそうになった。

「……なんで、おれに、やさしく、する」

「優しい？ このわたしが？」

「名を、くれた。食事も、与えようとして、くれている」

涙をこらえ、動かない身体でどうにかイーヴェのほうへと向くと、小首を傾げたイーヴェが無表情を崩し、淡く微笑んでいた。

「おまえにわたしの名を継がせようと思う」

「……つが、せ？」

「優しさなどではないよ。わたしは、ただおまえの力を、憐れんで

いるだけだからね」

「ちから……って」

「おまえを魔導師にする」

そういえば、イーヴェは己れを「守護者の名を継いだ魔導師」だと言っていた。

魔導師とは、国に仕え、天地の災害などから国を護る、緑の力を有した異能者のことだ。

「おれが……魔導師に？」

「可哀想にね、カヤ」

「え……？」

「魔導師とは、セカイにユメみる、悲しい生きものだ」

自分の解釈が間違っているのか、それとも持っているその知識はイーヴェには通用しないのか。

「それでもわたしは、おまえを魔導師にするよ」

これは優しさなどではないのだと言ったイーヴェは、その黒っぽい双眸を細め、悲しげな顔をした。

「可哀想に……また魔導師が、遠きユメをみる」

その言葉を理解することはできなかったが、稀少な力を持ち重宝される魔導師という存在は、しかし人間として悲しい運命にあるのだろうと、漠然と思った。

そんな魔導師に、自分はなるらしい。イーヴェによれば、そこに拒否権はない。カヤ、と名づけられた自分は、名づけ親たるイーヴェによって、魔導師の道を歩まなければならないのだろう。

「今日からおまえは、カヤ・ガディアンだよ」

そつと撫でてくるイーヴェの手のひらは温かい。

今はそれでいいかと、先のことも考えず、カヤと名づけられた少年は瞼を閉じた。

01 : また魔導師が、遠きユメをみる。(後書き)

楽しんでいただければ幸いです。

02 : この目に映る世界は。

怪我が癒えてからの日々は、イーヴェエとの、対面での一般教養から始まった。文字を覚え、書く練習から、文章の構築、言葉の遣い回し、数字を使つての計算、容積の量り方、動植物の成長法則など、学校という貴族が通う場所で教えられるものすべてを、イーヴェエに叩き込まれた。憶えられなくてつらいこともあったが、憶えると見ているものすべてが理解できるようになって、楽しくてならなかった。嬉しくてならなかった。だから、カヤはイーヴェエとの対面の勉強が、嫌いではなかった。むしろ、のめり込んでいった。

そして、魔導師の力を引き出す訓練もまた、同時進行だった。とはいえ、それまで無意識的に使っていたこともあったようで、当たり前のようにやってみせると感心されることがたまにあった。

「もっと学びなさい。たくさん、吸収しなさい。その分だけ理解が広がれば、ほかにも理解できることが増えてくる」

イーヴェエは厳しかった。けれども優しくかった。容赦なく魔導師の力を揮うこともあれば、温かくて美味しい食事を与え、ときには面白おかしい昔話を聞かせてくれた。

親というものを知らないカヤにとって、イーヴェエは、時間が経つにつれ、親のような存在になっていった。

「イーヴェエ」

「術式の構築中に無駄話とは大した度胸だ。なんだい、カヤ」

「これくらいどうということはない。あんたに訊きたいことがある」
「面白いくらい力のある子だね……なにを訊きたいのかな」

その日、カヤはイーヴェエに教えられた、錬成陣を使つての力の発現を試みていたが、あっさりと錬成陣を使いこなしてしまうと、それを消してイーヴェエを振り向いた。

「あんた、ずっとおれの面倒を看ているが、仕事はしてないのか？」

カヤはずっと、イーヴェエの住まいだというところで、世話になっている。ふたりきりでの生活は、慎ましく静かで、穏やかだ。だが、カヤがイーヴェエに拾われるまでそうであったように、人は働かなければ生きるためのものを得ることができないようになっていく。カヤは働くよりもまずイーヴェエによって教育を施されているが、それならイーヴェエは働きに出るのがふつうだ。しかし、イーヴェエはというと、仮住まいだというこの家から出て行こうとしない。つまり、働きに出ていないのである。

「わたしは魔導師だよ。魔導師であることが、わたしの仕事だ」

魔導師とは、ひとたび天災が起これば問答無用で借り出され、また、その被害を最小限に留めるべく研究を重ね、日々調査のために各地へ派遣されると聞いた。

イーヴェエはここでなにをしているのだろう。調査のようなことをしているふうでもなければ、ただカヤに教育を施しているだけだ。

「ああカヤ、ちょうどいい。雨が降ってきたようだよ」

ふと目を窓の向こうに向けたイーヴェエに、このところ雨が降るた

びそうされるように、暗黙の命令を受ける。

カヤは、なぜか雨の日は、イーヴェによって容赦なく外に放り出されている。雨が降り出しそうな日も、イーヴェは無言でカヤの襟首を掴み、外に放り投げる。そして、扉という扉の鍵を閉め、窓を閉め、カヤを絶対に家に入れない。けれども、不思議と、そうやってカヤが外に放り出されても、雨に濡れても、長くて数十分、短ければ数分で、閉ざされた家の中に戻れた。

今日もまた、襟首を掴まれ引き摺られる。

「おい、放せ。自分の足で行く」

「もはや恒例行事だ」

「やめろ。首が苦しい。服が伸びる」

「ほら、お行きなさい」

イーヴェよりもまだまだ小さい身体は、呆気なく外に放り出され、降り出した雨を浴びた。汚れるよりもなによりも、軽々と持ち上げられ放り投げられることのほうに、カヤはひどく不快感を思う。

泥に汚れた手のひらを見つめて、ため息をついた。

自分の手のひらは、イーヴェに比べると随分小さい。それでも、こんな小さな手でも、働けと言われたらどんなことでもした。小さくても、働くことに不自由しない程度には、役に立った。

「……おれはまだ子どものままか」

イーヴェに、歳を訊かれたことがある。九つだと答えたら、嘘だろうと言われた。嘘なわけがない。産まれたときから数えている、九つの歳を超えたと言ってやったら、珍しくイーヴェは驚いていた。どうやら、産まれたその瞬間からの記憶を持つというのは、一般的にあり得ることではないらしい。赤ん坊の頃の記憶は、ほとんどが忘れられてしまうものだという。だから憶えているなんてことは滅

多にないのだそうだ。

そろそろ十歳となるが、産まれたときからは大きくなっても、まだイーヴェには届かない手のひらに、カヤは息をつく。

頬に落ちてくる雨に不愉快を感じて、無造作に腕で拭いた。泥で顔が汚れたが、洗えば汚れは落ちる。イーヴェは汚れるのが嫌いだから、二日に一回は必ず沐浴する。逆にカヤは、汚れているのが当たり前だったから、イーヴェに無理やり引っ張られない限りは沐浴しなかった。それでも、そんな毎日に慣れてきている自分がいる。

「今日はなにを思案しているのかね……？」

もはや聞き慣れた声音に、カヤは顔を上げる。

いつものまにか雨は止み、晴れ空が広がるうとしていた。天気が悪いつき、カヤが外に出ると、必ず雨は止む。今日も、その現象は十数分で起きたようだ。

「おれはまだ小さい……」

「当たり前だろう。まさか、自分がおとなだと思っているのかい？」

「いいや……ただ、この手のひらが、小さいままなのはいやだと、思った」

「そのうち大きくなる。おまえ、ここに来てどれくらいが経ったと
思っているのだい？」

「半年くらい」

「その間に、おまえは確かに、成長している。子どものうちは子どもでいなさい。早くおとなになるうとする必要はないよ」

玄関の扉を開けたイーヴェが、おいで、と手招きする。服についた汚れを落しながら立ち上がると、カヤはイーヴェの手に招かれるまま、家に戻った。

「沐浴しておいで」

たまに思う。イーヴェは、自分を沐浴させるために、雨の日は必ず外に放り出すのではないかと。

「……イーヴェ」

「なんだい」

「おれは、このままここにいて、いいのか」

「なにを今さら。わたしは言ったはずだよ。おまえにわたしの名を継がせるとね」

この生活がいつまで続くかなんてわからない。イーヴェの気紛れかなにかで拾われたカヤは、カヤと名づけられても、この生活に慣れても、いつかまた人間としての生き方を失う可能性がある。考えたくもないと思っている自分に、随分と贅沢になったものだと思うたが、それならこの生活を護ればいいのかと、漠然とした願望が湧き上がる。

雨の日に必ず外に放り出されようとも、それは出て行けと言われているわけでも、二度と顔を見せるなど言われているわけでもない。必ずイーヴェは雨上がりにカヤを迎えにくるし、その後は沐浴させるために浴室に放り投げ、そうして温かい食事を与えてくれる。

これほど穏やかで静かな生活を、今まで経験したことがあっただろうか。それを得て、手放せるほど、カヤは人間というものを捨てたわけではない。

業が深くてなんだ、と思った。

生きたいのだ。

産まれた限り、生きることをやめたくはない。

「なんであなたは、おれに名を継がせたいんだ？」

「今は知らなくともよい。そのときがくれば、自ずと理解しよう。」

だから、おまえは利用しなさい」

「利用？」

「わたしはおまえが愚かであるとは、一度も思ったことがないからね」

カヤの心に潜んだものを読みとったかのように、イーヴェはその無表情にうつすらと感情を乗せる。

「わたしを存分に利用し、得たいと思ったものを得るがいいよ。そして……」

はつきりとした笑みを浮かべたイーヴェが、黒っぽい双眸の奥に、仄暗い光りを宿らせた。

「わたしを殺すがいい」

望んでいるのだと、主張している双眸だった。

「……死にたい、のか」

思わず問うと、イーヴェは笑みを深めた。

「いいや」

「なら、なぜそんなことを言う」

微笑みながら言うことではないのに、さらに笑みを深め、問いに對し否定する意味が理解できなかった。

けれども。

「あの日……」

と、イーヴェは廊下の窓から晴れ上がった空を見上げた。

「レヒテンが、わたしを置いて逝った日……わたしの世界は白と黒に覆われた」

ぼんやりと呟かれた言葉に、軽く目を見開いた。

「世界の美しさを、わたしはもう二度と、目にするのではないだろう。この目は、レヒテンのいない世界を、拒絶したのだから」

それは、イーヴェの黒っぽい双眸が、色を失っているのだということ肯定する言葉だった。

「おまえもいずれ……そうなるのだろうかね」

視線をカヤに戻したイーヴェは、色彩を手放してしまった双眸を細め、カヤの頭に手のひらを置く。

「まだ見えるのかい、カヤ」

そう、訊かれて。

まさか気づかれていたとは、思わなくて。

「なぜ……」

「見えているうちに、世界の美しさを、知っておくといい」

このところ目に覚えている違和感の正体が、崖から転落したときに負った怪我による後遺症なのだということを、イーヴェに教えら

れた。

そして。

「まあ、世界の美しさを真に知ることができたとき、おまえは絶望するかもしれないがね」

見ると言っているのか、見るなど言っているのか、わけがわからないイーヴェに、そつと頭を撫でられた。

「だからいつか、わたしを殺しておくれ、カヤ」

「……なぜだ。なぜ、そんなことを」

「この目に映る世界は、美しくない。それが、悲しいからだよ」

死を望みながら、死を拒絶し、だが世界への悲しみを知った双眸は、瞳の奥にずっと、仄暗い光りを宿し続けた。

それが、出逢ったときに感じた畏怖の正体、だった。

カヤは着々と、学を吸収していった。むろん魔導師の力のほうは、言われるまでもなく上達したというべきだろう。なにせカヤは、魔導師の力を引き出すための、媒体というものを使わずして、力を発現することができると想像するだけ、思い描くだけで、その力が表面に出てくるのだ。イーヴェは、それを珍しいと言っていた。基本的に魔導師は、なにかしらの媒体があつたほうが、力を内面から引き出し易いのだという。それをせずして力を表面化できるのは、それほどまでに力が強大だということらしい。

「魔導師の力というのは、系統で言うと二つに分けられる。攻撃系であるものと、防御系であるものだ。おまえの場合、どちらかが優っているというわけでもなければ、どちらかが劣っているわけでもない。つまり力が均衡に働いている」

「……だから？」

「これは魔導師の多くに見られることだが、偏りがなく均衡に力が使えるとしても、必ずどちらかに力は傾く。だというのに、おまえの場合はまったくの均衡、攻撃も防御も、等しく力が働くのだよ」

「……どちらかに偏りが出なければ、むしろおかしいと？」

「おかしい。偏りとは必ず出るものだ。つまり個体差、というものだよ。均等に力が出ると言われている風詠みの一族でさえ、僅かな偏りがあるのだからね」

人の身体が左右対称ではないのように、魔導師の力も、攻撃と防

御が左右に等しく並び立つことはない、イーヴェは言った。それができるカヤの力は非常に珍しい類のもので、またその均衡を保てるということは、どちら側の力も強い芯のようなものを持っている証拠であるという。今この国でそんな力を持っているのはカヤだけであるらしい。

「おまえは面白いね、カヤ」

「どこが」

「偏りがあってこそ、魔導師は魔導師たる力を発現できる。言ってしまうえば、ただの人間ではないちよつとした力を持った者が偏りであり、それが魔導師だ。おまえは、ただの人間ということになる」「……だが、おれは魔導師なんだろう？」「そう、だから面白い。おまえがいつたいどうやって魔導力を体内で循環させているのか、とても興味があるね」

にっこりと笑ったイーヴェにいやな気配を感じたカヤは、思わず一歩身を引いた。

イーヴェはさまざまなことをカヤに教え、知識だけでなく世の情勢も教えてくれているが、そういった師弟関係を持っている一方でカヤを実験体のように見ているときがある。面白がっているのはもちろんだが、そういうときのイーヴェはひどく穏やかな顔をした。それはカヤに違和感を思わせ、言い表しようのない不気味さを感じさせる。

カヤは、それがなんとなくいやだった。

「あんだ、なにがしたいんだ？」

「なに、とは？」

「おれになにを求めている」

「おや……幾度も言っているだろう。わたしは、おまえにわたしの

名を継がせただけだよ」

「なぜおれに継がせる？」

「おまえにはその力がある」

魔導師の力を、どうやって量るのか、カヤはその方法を知らない。だから、いくらイーヴェに力が強大だと言われようと、自身にその感覚はなかった。また、イーヴェから、力の容量を感じることもない。イーヴェ以外の魔導師を目にしたことがないせいかもしれない。イーヴェの黒っぽい双眸に見え隠れする仄暗い光りに畏怖を覚えているカヤとしては、もしかしたらそれが魔導師の力を示しているのかもしれないと、たまに思うことがある。

だとしたら、イーヴェの魔導師の力には、底が知れない不気味さがある。

「……おれにその力があるというなら、おれが、あなたより強い力を持っていても、おかしくないのか」

「もちろん。わたしはおまえほど力があるわけではない。ただそれを見ることができるといっただけのことだよ」

「おれはあなたより強いのか」

じつと、イーヴェの黒っぽい双眸を見つめた。見つめ返してくる双眸には、やはり仄暗い光りが奥に潜んでいる。

にい、とイーヴェは笑んだ。

「当然だろう」

そう答えは返ってくるかわかっていたが、イーヴェの確信している言い方には首を傾げる。なんの迷いもなく、自分よりも強いと言えることが、不思議でならない。

人間は優劣を思うさま突きつけられると、自分より優っているものを排除しようとする傾向がある。カヤは、幼いうちからそれらを経験して生きてきた。仲間だと思っていた者たちから、ただ仕事を手早く正確に片づけられるという理由から、手ひどく裏切られたこともある。

だから、イーヴェの優しさがたまにわからなくなる。親のように感じることはあっても、奥底の根本は信じられたものではない。

イーヴェが最初に言ったように、カヤはイーヴェの優しさを利用し、ひとりで生きられるすべを身につけているだけだ。所詮カヤはまだ子ども、どうしたっておとなには劣る。だからこそ、イーヴェの申し出を素直に受け、教育を甘受していると言えるだろう。

あともう少し、生きられるすべをすべて身につけてしまえば、イーヴェに飽きられて捨てられても、どうにかこの世界で生き抜いていける。イーヴェが、カヤに名を継がせたいとそう思っている間は、カヤの魔導師の力に興味を見出している間は、その興が反れないように気をつければいい。どうせ、この穏やかな生活を手放せないかもしれないと、怖気づいている自分がいる。カヤはそのことに愕然としていた。手放せないなら、強欲になれとまで思い始めたときには、笑いたくなるような衝動への反応に自分でも戸惑った。それでも、生への執着が潰えることはない。生きられる限り、生き続けたいと思っっている。そのためにイーヴェを利用することに、今さら、罪悪など感じる必要はなかった。

「……考えごとをしているね、カヤ」

一瞬で考えたことを、イーヴェには簡単に見抜かれる。素直に言うこともあるが、このときカヤは口を噤んだ。

「その目がいいね。おまえほど目で語る人間もいないだろう。まっ

たく……わたしはとてよいい拾いものをしたね」

嬉しそうに笑うイーヴェは、カヤに、自分を殺してもらおうことを期待している。死にたがりのくせに、死を拒絶する人間などイーヴェが初めてだ。

「いったい、この魔導師に、なにがあつたのだろう。」

「……あんだ、なんでそうなつた？」

「純粹な疑問は、ふと発せられる。」

「そうなつた、とは？」

「おれは生きたいと思っている。生きている限り、生きるものだと思っている。人間とは、そういうものではないのか？」

カヤの言葉に、黒っぽい双眸が細められた。不快に思ったわけではなく、それが僅かな思案だというのは、一緒に暮らし始めてわかつたことだ。

「……わたしは言つたね、カヤ」

「なにを」

「魔導師とは、悲しい生きものだ」と

「それがどうした」

「おまえが魔導師になつたとき、その意味が真にわかるだろうよ」

それは、まだ見習いの身では、理解できないということだろうか。

「……その悲しい生きものに、おれはなるのか」

「そう。わたしが、そう仕向けている。だからね、カヤ、勘違いしてはならないよ」

「勘違い？」

「わたしはおまえに優しいわけではないからね」

優しいとしか言いようのない行動を取りながら、それを否定する師に、カヤは「やはりわけのわからない人」だと、ため息をついた。

04 : 悲しい生きもの。 2

カヤがイーヴェエの仮家に居候して、あと少しで一年が経とうとしていた頃、いつものように雨降りの外へと放り出されたカヤは、思いつきで足許に錬成陣を描き、その中央に立っていた。

カヤの行動を部屋から見ていたらしいイーヴェエが、窓を開けて「なにをしている」のだと訊いてくる。

「今日の雨はひどい。もしかすると土砂災害が起きる」

「……だから？」

びしょ濡れになりながら、地面に木の枝で書いた錬成陣が消えないうち、結界を張る。結界、と言っても、カヤは「錬成陣を消さない」ように意識を向けるだけだが、効果はあった。錬成陣は雨を弾き、カヤが描いたときそのまま地面の時間を停めている。

「土砂災害が起きるから、だからその錬成陣で、なにをしようと？」

「というか、錬成陣を描く必要がおまえにあるのかい？」

「陣は補助だ。間に合わなければ、この陣で土砂を退ける」

「ほう。錬成陣を、いわば時限式にしたと？」

「考えている時間が惜しい」

「なるほど。それで、おまえ自身はなにをする気だい」

「雨雲を消す」

「……雨雲を消す？」

怪訝そうな顔をしたイーヴェをちらりと見やったあと、カヤは雨に打たれながら天を見上げた。遠くでは雷鳴が響き、閃光が走っている。

「できる。そう思ったから、消す」

「……おまえの理屈は、わたしには理解できないからね。まあ、やっつて見せなさい」

「暴走するとか、思わないのか」

「おまえが？」

「ああ」

「なぜ」

「……初めて試みる」

雨雲を消そうと思ったのは、できると思ったから、という以上の理由はない。できると思ったから、やってみようと思いついた。だが、不安がないわけではない。今まで無意識にせよ魔導師の力を使っていたとはいえ、天候を操ろうと思ったことは一度としてなく、また関心もなかった。大雨が降っても、カヤが外に出してしばらくすると止んでしまう雨は、そこまでカヤの関心を惹きつけなかったのだ。

だから、初めての力を試みることに對して、僅かな不安も抱かないほうがいい。もし力が上手く働かなければ、カヤは自滅し、見守るイーヴェを巻き込む可能性がある。

「先ほども言ったがね」

イーヴェの発した声に、カヤはそつと振り返る。

「わたしは、おまえの理屈が理解できない。わたしは詠唱という言葉の媒体を使って力を揮うが、おまえの場合は想像するという思考

が、媒体の役割を担っている。わたしはおまえのように力を揮うことはできないのだよ」

「……だから、わからない、と？」

「いいや」

薄く笑みを浮かべたイーヴェエが、違う、と首を左右に振る。

「できる、と思ったのだろうか？」

「ああ」

「ならば、それが答えだ。おまえの思考がその答えを導き出したのだから、できないことはないのだろうかよ」

楽しそうに言うイーヴェエに、一瞬だが目を丸くする。

イーヴェエは、まるきりカヤの力を信じきって、カヤ以上の確信を持っていた。

「……なんだい、その顔は」

「顔……？」

「おまえにしては可愛らしいよ」

ハッと、慌ててイーヴェエから顔を反らした。思った以上にイーヴェエからの言葉が嬉しくて、少し変な顔をしてしまっていたかもしれない。

「カヤ」

「……なんだ」

「早く、わたしにその力を見せなさい」

「わかっている」

イーヴェエがカヤに期待していることは、一つしかない。それは、

己れより上回る力で、その身を滅して欲しいという願いだ。カヤはそれを受け入れているわけではないが、こうして力に強い確信を持たれると、それはそれで嬉しく思うところがある。イーヴェはただ死を迎えたいだけでカヤの力を確信しているだけだろうが、カヤにとっては、自分を肯定してもらったようなものだ。

この世に自分は存在してもいい、イーヴェが認めてくれている。そのことが、カヤに強い喜びを与える。

生きていてもいいのだと、思考することをやめなくていいのだと、人として認められた気がして、生きようと思つてよかつたとすら思う。

「……今は考えごとなどおよしなさい、カヤ」

「うるさい」

「ほら、さつさとお見せ」

いつでもカヤの考えていることを見抜くイーヴェに、いくら魔導師としての力がイーヴェよりあろうとも、一生敵わないのだろうなと思つた。

これが師弟関係というものが、と感慨深くカヤは息をつく。

「窓を閉める。巻き込まれるぞ」

「かまわないよ。面白そうだからね」

とりあえず必要だと思われる注意を促すと、カヤは呼吸を整え、一向に勢いの衰えない雨雲を見上げて睨んだ。

そうして。

「退け」

一言、その声を発すると、カヤの思考に触発された陣が青白い光りを帯び始めた。

意図的に、自分の意思で、魔導師の力だというそれを使うようになってから、気づいたことがある。先にもイーヴェエが述べたように、カヤは、想像するという思考力が魔導師の力を引き出し、本来なら必要とされる錬成陣や詠唱といった媒体を、まったく使わない。

今回、足許に施した錬成陣は、考える時間が惜しいことから予め発動する条件を与え、カヤが考えるまもなくことが為される仕組みだ。錬成陣とはそのように使うこともあるが、本来は魔導師の負荷を軽減するものであり、カヤのような使い方をする者は少ない。

「おまえの力は、本当に、面白い」

イーヴェエは、いつものようにそれを声に出し、微笑む。べつに、魔導師の力そのものが、おかしいわけではないだろう。カヤの思考力が媒体になっていることが、イーヴェエにとっては興味深いことなのだ。

この力がカヤのものであり続ける限り、イーヴェエはカヤを見捨てたり裏切ったりすることは、ない。

ホッとしたカヤは、ただただ微笑むイーヴェエをちらりと窺って、自分はどうもこの人間のそばを心地いいと思っっているらしいと、諦めにも似た思いを抱いた。

「……あなたが優しいのは、気質、なんだろうな」

「？ なにか言ったかい」

「なんでもない」

「力の発動中に余裕だね。おまえが暴走しても、わたしは助けないよ」

「助けなど必要ない」

「いい言葉だ」

自分は優しくない、とイーヴェはよく言う。けれども、その瞳も、その声も、その表情も、なにを考えているかなどわからなくとも、一つだけわかることがある。

イーヴェは人間的に優しい。

自身でそれを認めようとしていないわけではないが、もともと情に厚いのだというのは自覚しているはずだ。だからカヤを拾い、育て、死を望みながら拒絶して生きている。カヤに自分を殺させるため、そのためだけに、今はその優しさに蓋でもしているのだろう。それでも、イーヴェから感じられる優しさがあるということは、持つて生まれた気質をそう簡単には隠せない、というところだろうか。

「……よそ見をされていていいのかい」

「いちいちうるさい」

イーヴェのことは、もうそれでいいかと、カヤは考えを途中で放棄すると意識を魔導師の力に集中させた。

数分後、突然と雨は上がる。

とたんに覗いた晴れ空に、人々は驚く。

「ほう……わが弟子は有言実行する子だね」

イーヴェが、どこか嬉しそうに声を弾ませて、空を見上げていた。

「これはいい構築式が完成しそうだ」

「……構築式？」

「わたしには不可能だが、おまえなら、発動させられるだろうね」

なにかの研究だろうか。

イーヴェのそれに首を傾げたとき、ふとイーヴェがなにかを見つ
け、そして珍しく目を丸くした。

「おまえ、いつのまに孫を持つ歳になつたんだい」
「は？」

なんのことだ、と思ったとき、カヤもそれに気づいた。

「これは弟子だ。おまえも、いつのまに息子を持った」

という声が、街のほうへ続く道から聞こえてきた。

「息子……まあ、名を継がせようと思っているから、そうなるのか。
カヤ・ガディアン、わたしの弟子だよ。それで、そっちの孫は？」

「だから弟子だ。ほれ、慈光を憶えとるだろ」

「エルテイ？」

「その息子だ」

「二世代で魔導師だと？ おや、おや……珍しいこともある」

イーヴェがひらりと窓から外に出てくると、街の方角からやって
来た者の姿も、漸くカヤの目で視認できた。

壮年の魔導師と、その腕に抱かれた幼い少年だ。

「こんなところにいたとは、探すのに手間だったぞ、護法の」
「護法の、なんてやめてくれないか。おまえにそう言われると寒気
がする」

「……久しぶりだな、イーヴェ」

「ああ、そうだね、ロルガールン」

イーヴェが誰かと親しげに話す姿など初めて見る。また、イーヴェに親しげに話しかける人間も、初めてだ。そもそも、この仮家に誰かが訪ねてくるなど初めてかもしれない。

「……誰だ？」

「ああ、ロルガルーンだよ。大海の魔導師ロルガルーン・ゼク・レクト、わたしの兄弟子だね」

「あんたにも師がいたのか」

「なんだいその顔。当たり前だろう。勝手にひとりで魔導師になれると思うのかい」

イーヴェにも師がいたらしい。そして兄弟子もいたらしい。当たり前だが、自分がイーヴェを師と仰いでいるからか、ちょっと驚いてしまう。

「イーヴェに弟子か……わしも歳を取るわけだ」

「風の噂で、魔導師団長に就任したと、聞いたけれど」

「この子を預かる少し前にな。おまえが姿を消したから、仕方ない、わしに矛先が向いたんだ」

「わたしが師団長なんてありえない」

「なにを言うか……しかし、先ほどまでの雨が綺麗さっぱり消えたのは、おまえの仕業ではなさそうだな」

「ああ、カヤだ」

ロルガルーン、というらしい壮年の魔導師の目が、カヤに向けられる。薄茶色だな、とわかるくらいにしかカヤの目には捉えられないが、ロルガルーンの腕に抱かれた幼い少年のほうが、印象的に惹きつけられる。

「その子ども……」

「ん？ ああ、ロザヴィンだ。道中で疲れて眠ってしまった」
「……壊れてないか？」

カヤのその発言は意外なものだったらしい。息を呑む気配がしたあと、なぜかイーヴェに頭を撫でられた。

「なんだ？」

「おまえも、わかるようになってきたようだね」
「なにを」

「魔導師の力、だよ」

言っていることは理解できなかったが、ロルガルーンの腕に抱かれたロザヴィンという少年は、カヤが言った状態で間違いはないらしい。

少しの沈黙のあと、思い出したようにロルガルーンと挨拶を交わした。

少しどころかかなりぼんやりとした印象のある幼い少年は、カヤより四つほど歳下で、ロザヴィンといった。魔導師の力が制御できないらしいと聞いたが、カヤが見る限りでは、ロザヴィンは単に己の力がわかつていないように感じられる。壊れている、と思ったのは、そのせいだ。力がどんなものかわかっていないから、扱いもわからなくて、ほとほと困っている状態なのだろう。そう説明すると、イーヴェが「なるほど」と頷いた。

「そういえばおまえは、自分の力にあまり驚いていなかったね」

「使えることが当たり前だと思っていた」

「……おまえらしいね」

「おれにとつて魔導力は、自然に力を貸して欲しいと頼むことだ。応えてくれなかったことはない」

「それは、おまえが特別だと、そういうことなのだがね」

「おれにとつては当たり前のことだ」

「人が誰しも自分と同じだとは限らないだよ」

「そうらしい」

無意識にせよ使っていたものが、自分だけの特別なものだと思えるほど、カヤは自惚れていない。力を自覚した今でも、それは変わらないことだ。

「その小さいのも、おれと同じだ」

「どう同じだと？」

「力を使えることが当たり前だと思っている」

「……そのようだね」

ふう、と息をついたのはイーヴェではなく、ロザヴィンを連れてきたロルガールンという魔導師だった。

「できればおまえに預かって欲しくて、こうしておまえを捜して、ここまでロザヴィンを連れてきたのだがな」

「子どもの面倒はカヤひとりで充分だよ」

「そのようだ。おまえも随分と厄介そうな力を持つとる坊主を見つけたな」

「これにはわたしの名を継がせる。そのために弟子にした。ああ、そろそろ王都へ行こうと思っていたところだよ」

「もはや魔導師と名乗らせるか」

「一年経つ。充分だ」

「おま……どれだけ扱いたんだ」

「失礼だね。これは勝手に育つたのだよ」

「……。おまえ、よく弟子なんか取つたな」

半眼したロルガールンは、改めてカヤをじっと見つめてくる。そんなに見つめられても困るのだが、と思いながらも、カヤも見つめ返した。すると視線が反らされる。

「ものすごい力だな……抑えられんのか」

「そういえば制御の仕方は教えてないかな」

「！ 一番に教えることだろうが！」

「これは勝手に育つのだよ、ロルウ」

「おまえは師だろうに！ 師が弟子の面倒を見るのは当然だろう！」

「めんどくせ……」

「おまえほんとよく弟子なんか取る気になったなっ？」

ロルガルーンがイーヴェエに怒鳴る、それはカヤにはなんとというか珍しい光景のような気がした。イーヴェエが誰かと親しげにしている、というのは、想像するに難しいのだ。

「カヤ！」

「ん」

「と、言ったな」

「おれのことか？」

イーヴェエを怒鳴っていたロルガルーンが、再びカヤを見やってくる。なんだ、と顔を上げて首を傾げると、意外と間近にロルガルーンの顔があつたので吃驚した。

「な、なんだ」

「あいつでは教えられんことを教えてやる」

「は？」

「この子と共に、その力を制御する方法を学べ」

「……。なぜあなたにそんなことを言われなければならない」

ロルガルーンは、まだ寝ぼけている少年ロザヴィンをカヤの前に突き出し、カヤとロザヴィンの間に移動して身を屈めると、頭の上に手を置いてきた。

「魔導師になると決めたなら、魔導師の因果を知れ」

「……魔導師の、因果？」

「わしらが持つ力は、護りたいものを護れる力だ。だが、その力が及ばぬこともある。わしらは限界を知らねばならない。まあ、おまえさんほどの力であれば、心配するようなこともなかるうが……お

まえには、『あちら側』へ行く要素が多くあるように思えてならん。だから学べ、幼き魔導師よ」

ほんぽん、とロルガルーンは頭を撫でてくる。イーヴェ以外にそんなことをしてくるのは、ロルガルーンが初めてだった。

「わしは大海の魔導師、そしてユシユベル王直下魔導師団の師団長だ。その権限に置いて、おまえを魔導師と認めよう。学べ、幼き魔導師。そして知るのだ、魔導師の因果を」

「……大袈裟に聞こえるが」

頭を撫でられるのが照れくさくて、ロルガルーンの手から逃れながら距離を置く。笑ったロルガルーンは、イーヴェの顔を見やっつてまた笑い、立ち上がった。

「戻ってくるのだな、イーヴェ」

「……わたしは守護者の名を継いだ魔導師だからね」

「宿舎にあるおまえの部屋はそのままだ。邸は……陛下が護ってくださっている。陛下に感謝するのだな」

「あのおバカは……本当にどこまでもおバカなのだね」

「陛下に対して失礼な発言は許さん。ほれ、戻る気になったのなら準備せい」

「はいはい。……カヤ」

なにやら勝手に話が進められていたが、カヤを見下ろしたイーヴェは、どこか複雑そうな顔をしながらも「行くよ」とカヤを促してきた。

「どうくへ？」

問うと、イーヴェは空の向こうに視線を流した。

「悲しき魔導師が辿る道は、この世界と共に在る。諦め、嘆き、絶望し、それでも魔導師は存在し続ける。その始まりの場所へ、連れて行こう」

まるでそれは宣告だった。

未だイーヴェの言葉で理解できないことはあるけれども、その中でもイーヴェが悲しいと言ふことのそれは、カヤにもなんとなく理解できるものだ。魔導師とは悲しい生きものなのだと、けれどもイーヴェのように生きなければならぬのだと、このときつくづく感じた。

カヤが師事するイーヴェは、ユシユベル王国の魔術師団に属していて、次期師団長と噂されていたらしい。行方不明となっていたせいで師団長の座はロルガルーンのものとなったが、それでもロルガルーンの次にこそ師団長になるものだと言われた。さらに、師団長がロルガルーンになった代わりとばかりに、大魔導師の称号がイーヴェには待っていた。

「要らないよ、そんなもの」

大魔導師の称号を前に、イーヴェはあっさり断っていたが。

「黙って受け取れ」

けつきよく無理やり、王の勅命で、称号を得ることになった。

「大魔導師、ねえ……なんの役にも立たないよ、そんなもの」

有難迷惑だ、とばかりにイーヴェは心底要らなそうにしていたが、とある部屋に案内されて「ここを自由に使えるぞ」と言われたら、要らなかった称号も役に立つと思っ直していた。

「わたしは研究に専念する。おまえ、もう一人前なのだし、まあひとりでやれるだろう。無理そうなときはロルウを呼ぶといい」

「おれの師はあんただと思ったが」

「教えられることはすべて叩き込んだつもりだよ」

「おれは力の制御を教えられてない」

「ロルウにお訊き」

研究室となるらしい部屋に入ってしまったと、イーヴェはなかなか外に出てこなくなった。師としてあるまじき態度だ、と怒ったのは、カヤではなくロルガルーンである。

なので、居を魔導師団棟に移してから、カヤの面倒はほとんどロルガルーンが世話することになった。

「やはりあれが師というのは無理がある」

ロルガルーンはぶりぶりしていたが、カヤの面倒を看ること自体に不満はないらしく、イーヴェとふたりで暮らしていたときより随分と生活が楽になった。まず料理が美味かったし、沐浴はとても気持ちよかったし、放置されていた白い髪はさっぱりと綺麗にしてみらえたし、破けてもいない衣服なども与えてもらえた。

「これ、ふつうに洗ってだいじょうぶなのか」

「……。おまえ、どれだけひどい生活をさせられとったんだ」

「イーヴェにはよくしてもらっている。これは、おれには高価過ぎる」

「それが魔導師の標準だ」

「……そうなのか」

魔導師になると、師から魔導師の官服が与えられるという。イーヴェはとりあえず用意してくれていたようだが、まるで身体の大きさを無視してくれたものだったので、それを着用するにはもう少し時間がかかりそうだった。だから急ぎよ、ロルガルーンが用意して

くれた。師ではないからきちんとしたものは与えられないというので、イーヴェの昔のものを作り直した官服だ。古着だが、それでも真新しい感がある。今までに袖を通したことのない感触がして自分には不似合いだと思ったが、ロルガルーンにはその恰好が当たり前なのだと言われた。

「服装は個人の自由だがな、みすぼらしさはいかん。魔導師はユシユベルの要だ。その尊厳は持たねばならん。そのためのものだ」

おもに国を災害から護るための魔導師という存在だが、他国の者にとつてそれは脅威にもなり得る力だという。だからその力を、誰にでもわかるように示しておかなければならない。官服にはそういう意味もあるのだそうだ。

「偉ぶる必要はない。だが、力を持つことは周知させねばならん。わしらは畏怖されておらねばならんのだ」

「力が、あるから？」

「そうだ。そうすることで、己れにとつてもそれが枷となる。己れより弱き者を、虐げることがないように」

持った力を、ただの力にしてはならない。己れの欲のためだけに行使してはならない。

ロルガルーンは、イーヴェがそれまで口にしたこともない、もつともな教えをカヤに説いて聞かせた。イーヴェがまともな師ではないらしいと、初めて知った瞬間だった。

「で、だな。おまえには、これの面倒を看てもらいたい」

「は？」

「わしがおらるときでいい。あとな、これが魔導師と名乗れるようになるまでは、組んでもらう」

ロルガールンが「これ」と称したのは、相も変わらばんやりと
している少年ロザヴィンだ。どこを見ているかもわからない双眸は、
切り揃えられた髪と同じ土色、ロルガールンの言葉に反応するもの
の声は発しない、カヤが試しに話しかけても、頷くこともなければ
表情が変わることもない。

どうしろというのだ、と思った。

「これは魔導師になれるのか？」

「なるしか道はないのだ」

「？ どういう意味だ」

「魔導力の系統の話は聞いたか？」

「ああ。おれは均衡状態にあるらしい。攻撃も防御も、等しく働くとイーヴェは言っていた」

それがどうした、と首を傾げると、ロルガールンはそっぽを向いているロザヴィンを抱き上げ、眠りを促すように背を撫ぜた。その優しい手つきに、ロザヴィンの意識はすぐに落ちる。

「……早いな、寝つくの」

「持った力が大きいうえ、肉体の成長が追いついておらんのだ。すぐ疲れるんだが、その自覚がなくてな……こうして教えてやらんと、眠りません」

「面倒な……」

そんな問題児、いやロルガールンからすればカヤも随分な問題児のようだが、それにしてもそんなロザヴィンの面倒を見るとは、難しいことだ。おまけに組むとは、任務が与えられれば共に行動するということだ。

「これが暴走したとき、止められるのはわしか、イーヴェか、おまえだ」

「……どういことだ」

「これは攻撃系の力しか持つとらん。防御系は、微々たるものでな」

「つまり？」

「攻撃だけで言えば、おまえを凌ぐだろう」

瞬間的に言葉を呑みこむ。自分より小さい子どもが、ロルガルンという壮年の魔導師に危惧させるほどの力を持っているというのだ。

「おれは、イーヴェより力がある。そう言われた。イーヴェがとんでもない魔導師だというなら、おれはもっと厄介だということになる」

「そうだな」

「そのおれより、そのほうが、攻撃力は強いと？」

「同等か、それより少し上か、というところだな」

具体的にはわからないが、ロザヴィンは危険対象と見なされているのかもしれない。

「あと一つ、ロザヴィンのことであつておくことがある」

「ほかにもまだあるのか」

「これが、こうなつた理由だ」

「こうなつた？」

「師団長たるわしのところにいる理由だ」

攻撃性の強い力を持っているからではないのかとカヤは思ったが、どうやらそれだけの理由ではないらしい。

「これは罪を背負つとる」

「……、罪？」

「この力で、人を殺めてしまったのだ」

ハツとする。

息を呑んだカヤに、ロルガルーンは悲しそうな顔をした。

「わかるか、護法の弟子よ」

護法とは、イーヴェの魔導師としての渾名だ。その弟子として、カヤは問われている。

「……魔導力は、人を殺すことができるのか」

「だからむしろは、力を持つとることを、周知させねばならんだ」

人間を殺す、そんなことにこの力が使えることなど、カヤは考えてもいなかった。この力は、自然と共にあり、自然のためにあると思っていた。

だから考える。

イーヴェが、自分を殺せと言ったのは、あれはいったいどういう意味だったのか。

他国へ力を示す意味もある官服を、身に着けるという意味はなんなのか。

「力が強いというのは、そういう意味では、本当に厄介だな」

「……おまえは理解しとるようだな」

理解させられたのだ、と思う。魔導師の力があるという自覚のある今と、自覚のなかった昔では、考え方も捉え方もイーヴェによって変えさせられている。だから理解しているのだ。

魔導師の力が、本当は、とても恐ろしいものかもしれないということ。

「力のことは理解している。おれは……そいつも、あまり人と関わらないほうがよさそうだな」

「そう言うな。自覚しとるのなら、それでいいのだ」

「だとしても……おれやそいつは、人を避けるべきだ」

強い力は争いの種となる。それは言われるまでもなくわかっていくことだ。そうさせないために、自身も力に溺れないようにするために、魔導師以外との接触は極力避けるべきだろう。

「ロルガルーン」

「なんだ」

「地方へ赴く任務はないか」

「なんだと？」

「国を見て回りたい」

もつと、世界を見よう。

もつと、国を見よう。

もつと、いろいろなものを見よう。

そうして考えよう。

「おれは、なぜ魔導師が悲しい生きものであるのか、知る必要がある」

イーヴェは言っていた。魔導師が悲しい生きものであると。

その理由も知らねばならない。

イーヴェの悲しみを知らねばならない。

「この面倒を頼んだばかりだというに……。近場からにしておけ。わしが忙しいのだ」

「どこからでもいい」

「なら城下からだ。それから少しずつ、距離を伸ばすがよい」

わかった、とロールガールンに頷くと、カヤは旅支度を始めるべく動き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6437y/>

魔導師がユメみたセカイ。

2012年1月1日01時27分発行